

低線量 CT 検診のインフォームドコンセント

低線量（低被ばく）CT を用いた肺がん検診の説明文書です。検査を受けることにより期待される利益（メリット）と、起こりうる不利益（デメリット）が記されています。

当クリニックでは受診される方の利益を最大に、不利益は最小とするように、これまでの経験を生かして検査・読影・判定を行っております。

【検診で期待されるメリット】

- ・ 胸部 X 線検査では指摘困難な早期の肺がんを発見できる可能性があります。所見に応じた適切な精密検査や治療を受けることにより、肺がんのために命を落とす危険を減らすことができます。
- ・ CT 検査により、肺がんのリスクが高くなるような肺の変化（肺がんの診断に至らないような小さなしこり（結節）、肺の気腫性変化や間質性変化など）を把握できます。喫煙歴や家族歴と併せて、その人に望ましい検診の間隔を提案できます。
- ・ 肺がん以外の所見を指摘できる可能性があります。具体的には縦隔の腫瘍、肺結核や非結核性抗酸菌症、初期の間質性肺炎、慢性閉塞性肺疾患の危険を示唆する肺気腫性変化、まれな肺の病気、心臓や大動脈の異常、などです。ただし、これらの所見全てに精密検査や治療を行うことの有効性は確立していないため、慎重な判断を心がけています。

【検診で生じうるデメリット】

- ・ 放射線被ばくについて、50 歳以上の方は低線量（低被ばく）の条件で撮影を行えば実質的な問題はありません。当施設は被ばくの指標である CTDI vol 2.5 ミリグレイ未満の条件で撮影しています。
- ・ 非常に小さながん、小細胞がんなど進行の極めて早いがん、CT でも指摘しにくい部位に生じたがんを見つけられない可能性があります。
- ・ 治療する必要のない良性の病変、あるいは放置しても天寿を全うできる進行の遅いがんに対して精密検査や治療が行われる可能性はあります。なお、低線量 CT 検診は 20 年以上の歴史があり、多くの知見が集積されているため、過剰な検査や治療が行われる危険は過去に比べ小さくなっています。
- ・ 医療行為全般に言えることですが、検診の異常所見を理由に精密検査や治療を行っている中で医療上のトラブルや合併症を生じる可能性はゼロとは言えません。
- ・ 肺がん以外の病気（甲状腺や乳腺のがん、心臓病、喘息など）を早期に見つけることは困難です。

以上です。ご不明な点はお問い合わせください。